

《伊勢物語（初冠）》①

昔、男が、元服して

昔、男、初冠して、

奈良の都、春日の里に

平城の京、春日の里に、

領地のあった縁で、鷹狩りに行った。

しるよしして、狩りに往にけり。

その里に、たいそう若々しくて美しい姉妹が暮らしていた。

その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。

この男は、（その姉妹を）覗き見てしまった。

この男、垣間見てけり。

《伊勢物語（初冠）》②

思いもよらず、

思ほえず、

（寂れた）昔の都に、（美しい姉妹が）たいそう不釣り合いな状態で住んでいたので、

ふるさとにいとほしたなくてありければ、

（男は）心が乱れてしまった。

心地惑ひにけり。

男は（自分の）着ていた狩衣の裾（すそ）を切って

男の、着たりける狩衣の裾を切りて、

歌を書いて贈った。

歌を書きてやる。

その男は、しのぶずりの狩衣を着ていたのだった。

その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

《伊勢物語（初冠）》③

春日野の若々しい紫草のように美しいあなたたちに魅せらせて

春日野の 若紫の すり衣

恋しのぶ私の心は、しのぶずりの乱れ模様のように限りなく乱れています。

しのぶの乱れ 限り知られず

と、すぐに歌を詠んで贈った。

となむ、追ひつきて言ひやりける。

事の成り行きを趣があると思ったのだろうか。

ついでおもしろきこととも**や思ひけむ。**

《伊勢物語（初冠）》④

陸奥で産する しのぶずりに染められた乱れ模様ではないけれど

陸奥（みちのく）の しのぶもぢずり 誰ゆゑに

あなた以外の誰のせいで心が乱れ始めた私ではありませんのに。（全てあなたのせいなのです。）

乱れそめにし 我ならなくに

という歌の心持ち（を取り入れて詠んだの）である。

といふ歌の心ばへなり。

昔の世の人は、

昔人は、

このように一途で優雅な振る舞いをしたのであった。

かくいちはやきみやびをなむしける。